

『続・本のある家』

はじめに

ジャパノロジーゼミを通して得た多岐にわたる知見を、自らの課題の作成に如何に活用しようかという問題に付いては、しばらく頭を抱えることとなった。と言うのも、かの講義で扱われた内容は、途方も無く膨大であり、下手に大きなテーマに挑んでしまつては、私の手に余ると思われたからだ。そこで否応無しに、今後の自分の勉強に関わつてくるのであろう講義内容を、一つだけ選び、それに関して課題を制作する運びとなった。その講義の担当は、青原さとし先生である。ご自身のお父上の足跡を追われた映像に、抜粋ながらも私は感激した。

さて、今「今後の自分の勉強」という表現を用いたが、これには少し説明が必要だ。至つて個人的な話になってしまい、大変恐縮なのではあるが、私はこれからも勉強を続け、あわよくばその勉強を仕事にしたいと思つている。現在の私の専攻は、日本中世史ということになっている。しかし、私は単なる目安に過ぎない時代区分によつて自らの勉強を狭めるようなことをしたくはない。今後は、膨大な歴史の中に一つの軸を見つけ、それを自分の勉強の軸にもしたいと考えているのだ。その一つが、該課題のテーマである。そして、それが青原先生の講義に関連する、所謂「系譜学」であるのだ。この学問は非常に魅力的な分野である。言うまでもなく「系譜学」とは特定の家の系譜を学ぶ学問だ。この学問の中でも私は今後、自家の系譜を学ぶ「系譜学」について言及してゆきたい。

自分の家に伝わる系譜や先祖について学ぶ行為には、それなりの意義があると私は思う。自分の先祖の生涯を理解し、それを誇りに思うことは決して悪いことではない。しかしながら、ここで一つ注意しておきたいことがある。私は何も身分制に関して、自身の系譜を誇れと言つていてはいいわけではないということだ。正直な話、私もかつては自分の系譜を誇りたがる質の人間であつた。しかしながら、少しばかり勉強を重ねた今となつては、このご時世、先祖の身分にこだわることを愚かだと思ふようになった。

系譜と身分の問題は根強い。現代社会を生きる私たちにも、これらの問題について考える時間は必要なのだ。

では、系譜を学ぶことによつて、身分制が再生産される危険性は存在しないと切り切るのだろうか。これは系譜学の抱える最も大きな問題だ。平等社会の為には、系譜など忘れ去ってしまう方が良くはないか、といった意見も必ず提起されるはずであ

る。これについて、系譜学はどう反論するのか。実に大きな問題であり、現段階の私には答えを出すことができない。であるので、ここでは系譜学を巡る現状を整理しておく。

まず、人はそう簡単に過去の身分を忘れ得ない存在だということを押さえておきたい。それは近年でも発足の相次ぐ同族会や、旧藩士会などの動向を見ても明らかだ。現在には、誇るべき(?)系譜を所持している人々や、逆にかつて激しい身分差別を受けた人々のみが系譜伝承を伝え、それ以外の人々が系譜を忘れ去るという動きが確かにある。つまり、身分差別は二極化され、再生産されていると言っても過言ではないのである。一般の身分制度が完全に撤廃されてから、未だ七十年ほどしかたっておらず、それも当然なのかもしれない。そもそも、人類が歴史と共に成長し、いつか平等で平和な世界にたどり着くなどといった見方は、あまりにも樂觀的に過ぎるのだ。中世的世界が復活する可能性が現在にも存在することを指摘したのは、私の最も尊敬する史家のひとりであるが、それについては、私も全くの同感なのである。系譜や身分制を忘却することがいつになったら叶うのか、私には全く見当もつかない。それならば、系譜をよく知ることにより、正しく向き合う方法を探した方が良いのではないか。それが私の意見である。ここで言う系譜を知ることとは、系譜が作られる経緯にまで目を充てようという姿勢であり、表面的な系譜の内容に盲従することではないのだ。

前述したが、自分の先祖がどのように生きたのかを知る事は大切だ。それによって、人々は過去の事象を身近に感じることができるとは思う。しかし、系譜を誇る場合には、過去の身分制に関してそれを誇ってはいけない。この区別は非常に難しいことではある。身分制社会を生きた特定の人物について言及する場合、その人物自身の身分についての言及を避けることはできないからだ。ではあるのだが、ひとまずは各々がその区別を意識することが重要であろう。「うちは平家の流れで…」などと得意げに話す人々は五万と居るが、多少なりともこの列島内で羽振りを利かせていた家系には、総じて(大凡)源平藤橘何れかの本姓があるのであり、且つその系譜の確実性を証明できる家はほとんどない。人々はあるふれた、その上極めて不鮮明な証拠に依る系譜を誇っているのだ。

そして、ほとんどの系譜が、身分制社会の中において、自家を有利な方へ導こうとする先人たちによって作られた偽りの系譜であることも忘れてはならない。この場合、大切なのは先祖の過去の身分ではなく、必死に家族を守り、あらゆる困難にも耐えて来た彼らの足取りなのである。仮令系譜が偽りのものであっても、そんな系譜まで作成し、家族を守った人々の努力については、「汚い行為だ」と言い捨ててしまうことができないだろう。

前置きばかりダラダラと長くなってしまった。いよいよ本題に入ろう。当該課題では、

私自身の父方の祖父の生涯を追った。先祖の中でいずれの人物の足跡を辿るか、この選択は再び私を悩ました。存命中の人物では調べ甲斐がないが、一度も会ったことのないような人物では、多少張り合いが無い。となると、選択肢は自ずと既に鬼籍に入っている父、母方祖父、父方祖父に限られた。が、私には未だ昨年逝去したばかりの父について、その生涯を追うことに僅かな抵抗があった。残る選択肢は三人である。さて、ここからどうやってしぼろうかと三たび悩み、少し考え、一番思い出のある人物を選んだ。その答えが父方祖父である。父方の祖父とは幼い頃同居していたし、思い出も少しはあった。こうして、該課題における目標が決まったのだ。

尚、該課題で私は、敢えて図版や写真を使用しないことにしている。これは私のこだわりである。私は元来、大きに文学に憧れるところがあり、どうしてもその真似事をしてみたかったのだ。お読みになる方には、煩瑣でしかないことであろう。それは、承知の上である。が、何も評価については、無理して全文を読んでもいただくことはないのである（と、私が言うのは、何とも妙ではあるが）。この「はじめに」を読んでいただければ、あとは全体の字数くらいに目を通していただき、該課題が適当に作成されたものではないことを察していただければ、私にとっては十分なのである。であるので、私の提出するこの課題の形式を、無個性が生み出した苦肉の策と捉えないで欲しい。最も無个性的とも思えるこのレポート形式が、私の個性である。

本人にとって重要である、自身の系譜を知ることが、多くの他人に取ってはどうしてもいいことだ。これも系譜を学ぶ上で覚えておかなければならないことである。他人の先祖について連々書かれた紙の束は、見るに耐えない代物であろう。然るに、該課題の本質は、内容云々というよりも、私が祖父の足跡を追ったという行為そのものである。勿論、目を通していただけるならこれほど嬉しいことはないが、以上の理由から、決して無理はなさないでいただきたい。

私には中学時代に先祖調査に勤しんでいた過去がある。当時はなんら深いことを考えていなかったが、該レポートの作成に際して、かつての調査がかなりの部分で役に立った。該レポートは、その成果に追調査を加え、形を整えたものである。

とまれ、かつての調査が、私の歴史観（そんな大それたものではないが）形成に大きく影響を持ったことは覆りようの無い事実だ。

一、「少し怖い人」	五
二、少年期	八
三、戦火	十一
四、学問	十六
五、僧侶として	二十
六、晩年	二十二

一、「少し怖い人」

私の祖父は、私が小学校に入る前に逝去した。よって、少しの間は彼と同居していたのであるが、その記憶は極めて断片的で曖昧なものだ。

私の持つ、祖父のイメージは「少し怖い人」である。

口数が少なく、表情も乏しく、決して冗談の一つも言わない。それが彼のイメージなのである。「少し」という表現をつけたのは、私自身が直接的に祖父の怖さを感じるような行為を受けたことがないからだ。直接何か会話をしたような記憶も無く、あくまでもこれはイメージに過ぎない。

果たして、このイメージは正しいもののだろうか。祖父は本当に「少し怖い人」だったのだろうか。まずはそれを確かめてみたい。

初めに、祖父と一番近い所にいたであろう、祖父の息子、つまり私の父のエッセイから意見を頂くことにしよう。

—温厚そうな人。

と、知り合いからは言われたが、少年だった私にとっては、まったく逆の人物であった。神経質で癪が強く、威圧的で暴力的な人物として、わたしの前にいた。五十を過ぎて、あの父を回想することに少なからぬとまどいを覚えるが、いま、こうして書きながら、わたしは、ようやく、険悪だった父との関係を清算できる気がしている。わたしは、しばしば父に殴られた。

(中略) わたしは見たことがなかったが、母も殴られていたのを、つい最近になって知った。闇は、深い。

このあと、エッセイの内容は、当時中学生だった私の父が、口論の末に己の父を殴り、家出をやつてのけた場面に移る。普段、祖父から殴られていた父自身も、祖父の鉄拳が「教育、躾けの目的」だったであろうことを認めているが、その関係性たるや、凄まじいものである。

故に父の持つ、祖父への反抗心は根強かった。私の家には祖父の遺品が少ないのであるが、これは多く父によって破棄された結果だという。

皇国史観を抱いていた過去を持ち(後述)、古風で暴力的な側面の目立つ祖父と、中原中也や大杉栄を敬愛し、詩人か革命家を目指していたという父。この二人が反発しあうのは、火を見るよりも明らかであったのだ。この事件の後、祖父は父を殴ることを辞

めたが、同じ家の中でも、お互いにほとんど目すら合わさなくなったという。

この記述自体は、祖父のある側面を描いたという点で有用なものである。もし、祖父が祖母を殴っていたということが事実ならば、それは許されることではない。既に鬼籍に入っている祖父について、とやかく言うのも後ろめたいが、「少し怖い人」というイメージは祖父の一面を良く表していたらしい。いや、躰けに關してすぐに手を出すという癖は、現代においては「少し怖い」などでは済まないであろう。子供の抱く印象というものも、案外に馬鹿にできないようだ。

あとあと思い出したことであるが、二つ上の私の姉は当時幼稚園児ながら、行儀の悪い事をする、いつも祖父の脇にあった木刀でごつんと優しく殴られていた。極めて幼かった私は、辛くもその制裁から逃れていたが、このイメージはやはり、かなりの部分で正しかったのかもしれない。

折角、「怖い人」という祖父のマイナスイメージを崩そうと試みたのだが、どうやら失敗に終わった。そういえば、私も幼少期に、祖父によって縄抜けを仕込まれたことがある（どこで活用しろというのだろうか。残念ながら、まだ日の目を見ていない）。何とも言えぬ、妙な粗暴さのある祖父である。今の所、堅苦しく乱暴な部分ばかりに目がいつってしまう。祖父はいつも着流しを着て、泰然としていた。その姿は今でも鮮やかだ。豊かな白髪も私の記憶の中に深く刻み込まれている。

結局、祖父は私に取って、いつまでも「少し怖い人」のままなのかもしれない。幼い頃に植え付けられたイメージは、簡単には壊れない。ではあるが、私が父から祖父の悪口を聞いたことは一度として無いのだ。子供に先入観を与えまいとする父の気遣いであろう。然るが故に、私の祖父像は「少し」怖い人になったのだとも言える。

そんな祖父と私の暖かい思い出と言えば、日のあたるポカポカとした縁側で、一緒に干しぶどうを摘んだことと、茶道の手習いを受けたことくらいであろうか。祖父は、苦い抹茶の飲めぬ私の為に、抹茶の中に砂糖を混ぜてくれたことを覚えている。こればかりは、思い返してほっこりとしてしまう。孫は目に入れても痛くないとはよく言うが、私たち姉弟は祖父にとってそんな存在だったのであるうか。

祖父は大学教員であったので、元学生の方々も彼と深い接触を持っていたはずだ。果たして祖父はどのような教員であったのだろうか。

今までの私のイメージからして、さぞかし厳しい評価を学生達に下す、恐ろしい教員だったのではないか。予想するところは平凡そんなものであったのだが、数人の元学生の方の意見を聞く限り、祖父は存外に「優しい先生」であったのだという。ここで言う優しいとは、勉強に励む学生への手助けが多かったという意味だ。意外や意外といった感が拭えないが、これはやはり、父のエッセイにも見られる祖父の外面の良さなのでは

なかるうかと私は考える。

家の中では思うがままに振る舞う祖父も、外からの評価には非常に敏感であったようだ。これは、いくらか私自身の癖と重なるところがあり、恥じ入るばかりである。勿論、私に暴力癖などは存在しないのだが…。

思い返せば、私はよく祖父と似ていると言われる。変に理屈っぽいところから生臭いものが苦手と言う些細な食の趣味まで、彼と性質が酷似しているというのだ。私にも自覚が無いではないのだが、こうなっては、私が周囲から「少し怖い人」などと思われていないことを願うばかりだ（祖父が禿頭でないことには安堵感を覚えるが）。

さて、成人後、年を重ねてからの祖父について、記憶をたどってみた。現れたのは粗暴さの目立つ、白髪老人の姿だ。身内のマイナスイメージではあるが、鉄拳制裁も祖父の性質を考える上で重要な要素であるらしい。私はその制裁から逃れたものの、どうやら私の祖母、父は祖父から間違いなく「躰け」を受けた経験があるということも分かった。本人からすれば悪意のない暴力だったのであるが、殴られた側の恨みは深く残る。祖父と父との間の溝は、こうして深まったようだ。これを「頑固親父の鉄拳」と呼ぶか、単なる「暴力」と呼ぶかは、極めて微妙なところであろう。

とまれ、祖父が多少なりとも暴力的であったことには、時代背景の他にも必ず要因があるはずである。祖父の人格は、どのように形成されていたのだろうか。これから少し調べてみたい。まずは少年期から、その生涯を触れてみよう。

二、少年期

祖父の生涯を記すには、まず出生から書き始めなければならない。これについては除籍謄本を見るのが確実だ。ここからは史学科生らしく、主に文書資料に頼って筆を進めたい。

謄本に依ると、私の祖父は、大正十年二月七日に新潟県に生まれらしい。時としては原敬首相が暗殺された年であり、恐慌による経済不況が相次ぐ年代である。そんな時勢に祖父は生まれた。

祖父の父の名は武田雷雄、母の名は武田キエと言った。生家は真宗大谷派の末寺であり、雷雄は十三代目の住職であった。雷雄は僅かな弟子をとり、俳句結社を持つ俳人でもあり、キエは県下の政治家の娘であった。キエなどという、寺院生まれとしか思えない名前ではあるが、キエは在家の出身である。祖父は四男坊であった。後には雷雄の後妻の子である弟や妹がたくさん生まれ、彼は九人兄弟の中で育つこととなる。ある程度成長してからは、弟妹たちの世話に明け暮れたことであろう。

この祖父の両親について、私が知っていることは少ない。僅かに親族から聞いていることと言えば、キエが嫁入りに際して、三艘の船と共に信濃川を下って来たという伝承のみである。彼らは放っておけば、時と供に忘れられてゆく先祖たちである。

さて、在家の出身であるキエは、雷雄と結婚することにより、慣れぬ坊守業を必死に勤め始めた。寄地主の家に生まれたということもあり、恐らくは家事すらロクにこなしたことがなかったであろう。それでもキエはしっかりと坊守を勤めたという。

が、平穏な暮らしはそう長くは続かなかった。そんな苦労もあってか、キエは祖父の幼い頃に逝去してしまったのだ。死因は今のところ分かっていないが、生みの母のいない寂しさを、少年時代の祖父はどうやって耐え抜いたのであるか。こればかりは想像もつかない。私の家に残るキエの写真は、僅か一葉だけであるが、意思の強そうな明治女性といった印象が強い。彼女の生涯もまた、私に取っては興味深いのである。

私は祖父の口から、自身の幼少時代の思い出話を聞いた事がない。こうなれば、同居期間の長かった私の母に話を聞くのが一番であろう。母曰く、祖父は自身の生まれた寺院について、よく「貧乏寺」と言っていたそうだ。なるほど、祖父の粗暴さは貧しい生活から生まれたのかもしれない。

しかし、今になって調べてみると、祖父の生まれた雪国山行順寺は、いたってありふれた真宗寺院であり、特に零細というわけでもなかった。どうやら、かの言には多少なりとも謙遜が含まれていたようである。むしろ、貧しい農村の中にあつてこの家業は、

わりかし稼ぎの安定したものであったと思う。それは祖父の兄弟たちの進学先から考えて、まず妥当な推測であろう。

私自身、所謂本家筋にあたる、かの寺院に足を運んだことは二度しかないが、特筆すべき点も見つからないような、ありふれた村の寺院であった。造り自体もそう古くはなく、屋根瓦に誇らしげに掲げられた武田菱の家紋だけが印象深かった。

書籍が多く、農村の中においては一端の文学サロンを形成するのが、当時の地方寺院の一般的な形式であろうが、祖父の生家である行順寺もまたご多分に漏れず、代々俳文学や和歌をよくする寺院であった。そして、この多くの書物を持つ寺院に生まれたということは、その後の祖父の人生に大きな影響を与えた。彼が学者としての道に入った理由は、案外こうしたところにあるのかもしれない。祖父の勉強好きは、村内でわりかし評判であったようだ。これは雷雄からの手ほどきがあつてのことかもしれない。少年時代の祖父は、境内で開かれる父主催の俳句会、「野の座」を、好奇心に溢れた眼差しで見つめていたことであろう。

祖父の異母弟であるZK氏は祖父の幼少期について、

「兄貴（祖父）は身体が弱かったから、ずっと勉強ばかりしていた。」

と述べている。そういえば、私の描く祖父の姿も、か細く、あまり健康的とは言えないものである。どちらかと言うと、如何にも学者っぽいという風かもしれない。身体のか細さについては、私も人の事をとやかく言えた身分ではないが、これも遺伝なのかもしれないと考えると、因果なものである。

ともかく、寺院の生まれであり、身体が弱かったという二つの要素は、祖父の人格形成に大きな影響を与えたようだ。何かと娯楽に乏しい当時のことである。身体の弱い者には、学問に没頭するくらいの暇つぶししかなかったのであろう。

また、ZK氏は、祖父についての言及のなかで、

「俺は兄貴に信濃川に投げ込まれたことがある」

と、続けられた。この行為も祖父の暴力性の証左であるが、私自身、少年時代の祖父も兄によって信濃川に投げ込まれていたという昔話を耳にしていたので、この兄弟の野性味に苦笑いせざるをえなかった。祖父曰く、「泳ぎを覚えさせたかった」とのことである。この乱暴さは時代性というもののせいかもしれない。祖父は兄に対する恨みを、弟に向けて発散していたのである。

暴力性などと厳めしく書いてしまったが、祖父のそれは、決して虐待などとは呼べぬものではあった。これについて、一番の被害者である父が、どのように思っていたのか、今では確認のしようがないので残念であるが、祖父の指導はいわゆる「厳しい親父」の範疇からは決してはみ出さないものであるうとは思う。が、これは私の願望であるのかもしれない。何にしろ、信濃川に投げ込まれるなんてことは、カナヅチである私からしてみれば、たまったものではない。

戦前生まれの少年らしく、多少は腕白な部分の目立つ祖父であるが、その中にも学者となる土壌のようなものは存在したようだ。幼少期の彼の写真は、比較的によく保存しているが、毬栗頭の素朴な少年であった。顔は私の父に酷似している。

祖父の幼少期について、もつと調べを進めたくはあったのだが、いくつかの理由によって、それは叶わなかった。兎も角、次に進もう。

三、戦火

幾時代かがあって、大きな戦争があった。第二次世界大戦である。今更言うまでもないが、この戦争は極めて多くの人々の人生に、極めて大きな影響を与えた。帝国主義的なイデオロギーが時とともに膨らみ、私の祖父の青春をも、見逃さずに飲み込んでいく。以下、彼と戦争との関わりを見てみよう。

領土拡大の野望に燃える日本が、暴力的な侵略行為を進めている時、祖父は京都に居た。激しく揺れ動く情勢に不安を覚えながらも、彼は学問を志す大学生として、只管に勉学に励んでいたものと思われる。

祖父はこの頃には得度を済ませていたので、真宗大谷派の大学である大谷大学の国文科に通っていた。京都の北郊に位置する、さほど大きくはない四年制大学だ。

私の父のエッセイに依ると、当時の祖父の下宿先は紫野大徳寺の聚光院であったという。現在とは違い、住宅事情の悪いころだ。僧侶ということもあり、彼が寺院に下宿するという流れは自然な運びであろうと、父も推測している。

祖父は下宿先を探すにあたって、一番塔頭が瀟洒である聚光院を選び、門を叩いた。最初は出て来た住職に断られたという。曰く、「真宗の坊主はだめだ」。厳しい修行を積む禅宗の僧侶からすれば、真宗の僧侶の生活は極めて自堕落に見えたのだろう。そこで祖父は、「住まわせないで分かるものか、だめなら追い出せ」と言い返したという。すると、住職はおもしろがつて下宿を認めてくれたそうだ。こうして祖父の大学生活が始まったのだ。さながら一休さんのようだと思うのは私だけだろうか。

祖父の大学生活に関する資料は全く見つかっていない。これについては、残念ながら確かな証言も得られておらず、参考となるのは「自分は普段から勉強をしていたので、学校のテスト期間は暇でしかたがなかった」などという人づてに聞いた祖父自身の自慢話くらいだ。自信過剰は我が家のお家芸のようである。

祖父が何故国文学を志したのかは謎であるが、これは恐らく彼の父親である雷雄の影響に違いない。更に、この雷雄も父である恵雄の影響を受けて俳文学を始めたようであるので、先祖からの影響というものは馬鹿にできないということが確認できる。ここでは祖父の生涯に迫ることを主眼としているので、生家については詳しい言及を避けるが、特定の人物を語る上で生活環境への言及は欠かせないようだ。

祖父は雷雄から得た俳文学の知見を基盤に、勉強を進めていったのだろう。学校の成績は良かったという話も聞いたことがあるが、これも恐らく本当に違いない（この辺は私に似ていない）。

しかし、祖父がいくら学校の勉強をこなそうが、戦争を止めることはできなかった。昭和十八年十二月、彼の元に「赤紙」が届いたのである。所謂学徒出陣だ。

赤紙が届いた時、祖父がどこにいたのか、それは分からない。しかし、彼はいったいどんな気持ちでこの紙を手にしたのであろう。国の為に命を捨てようと思ったのだろうか、絶対に死にたくないと思つたのだろうか。こればかりは是非、本人の口から答えを聞きたかった。

私が新潟県から取り寄せた兵籍によると、祖父は横須賀を編成地とする防空第三連隊に応召され、同日に第十五中隊に配属されたようだ。彼は大きな不安を抱きつつ、汽車に揺られたことであろう。横須賀での生活がどのようなものであったのか、これも全く分からない。が、ただ一つの頼りである兵籍によると、翌年昭和十九年の二月末には基本教育終了とあるので、少なくともそれまでは、かの地で戦友たちと基本的な軍隊生活での心得を習つたのであろう。何も知らない私からすると、ずいぶん長い教育期間であると感ずる。祖父もさぞ苦労したことであろう。

しかし、祖父の境遇はまだ幸運な方であった。彼は翌年の六月に、第二次幹部候補生に採用されたので、軍隊生活を上等兵からスタートすることになったのだ。彼の軍服の襟には階級章に加え、士官候補生であることを表す特別徽章が縫い付けられた。この徽章は、幾度となく祖父の身を鉄拳から守つたに違いない。

そして祖父は、高射砲第三百十三連隊に配属され、その後は順調に階級を上げてゆくことになる。この昇進は実にとん拍子で、十二月には軍曹にまで昇進していた。これは偏に、この時代に大学通いであるという一点に依る昇進であるが、地獄のような一兵卒を経験せずに済んだのであるから、芸は身を助けるといったところであろう。

さて、時は同年の二月十日に移る。この日、軍曹となった若き幹部候補生は、肩で風を切りながら、千葉県陸軍高射砲学校に入学した。そして、しばしの連隊復帰期間を経て、八月六日には再び高射砲学校へと舞い戻る。祖父はこの地で日本史上の大転換期を迎えることになったのだ。

この頃の軍隊生活の有り様は、祖父の従軍日記が現存している（と言うより、私が実家を引き掻き回して見つけ出した）ので、詳しい内容を知る事ができる。興味深い点、特に祖父の人間性を知る事ができる記述をピックアップしてみたい。

まずは八月六日、入校したての祖父は、

「疲労甚シ、暑サト蚊ノタメニ眠レズ…」

というような具合であった。軍隊生活での辛さが伝わってくるようだ。そして、その

後はしばらく、一行ほどの特筆すべき点のないような、雑事の記述が続く。そんな中、私の目を引いたのは八月十三日の記述である。

「八月十三日（中略）十六時半ヨリ作業、聯隊ノ候補生、居室勤務タル我が命ニ服セザリシニヨリ鉄拳ヲ加フ」

私は驚いた。この記述では事件の詳しい内容は分からないが、少なくとも祖父が部下を殴ったということは明らかである。「聯隊ノ候補生、居室勤務タル我が命」という記述からは、自分の階級に酔いしれているような印象を受ける。彼は戦時下において、下士官としての任務を誇らしげに全うしていたようだ。列島全体が熱を帯びていた時期であり、それも仕方の無いことかもしれないが、やはり複雑なものだ。

日記の記述は八月六日に始まっているので、この日記はさしたる戦闘の記述も無いままに、終戦を迎える。祖父はどのように終戦と向き合ったのであろう。

八月十四日。最早満身創痍の日本が、涙をのんで無条件降伏の決断を下した日、この頃にはすっかりと血気盛んな「初級尉官」であった祖父は、何を思ったのであろうか。十五日以降の日記の記述から、敗戦に関するものを抜き出してみよう。まず、十五日の敗戦直後、

「唯々涙ニムセビ拳ヲニギリ正坐冥目スルノミ」

と記している。この記述自体は、祖父の軍国青年ぶりが発揮されていた今までの文脈からして、自然な流れだ。気になるのはその後続く、

「郷へ帰レルコトヲ喜ブ甘キ想我方内ニアリ」

という記述だ。これを軍国青年の零した本音であると、私は考えたい。いくら時勢に身を任せ、強気な発言を続けようと、祖父はこの時、私とさして歳が変わらなかつたのである。青年軍曹である祖父は、郷を思いながら、軍隊生活を耐え忍んでいたのではなかろうか。

しかし、彼が日記の上で弱音を吐いているのは、この一文のみである。その後の記述では再び、

「三千年ノ光輝アル歴史今ケガサル：死ニマサル苦難・屈辱…」

「敗戦国民族ノ血ハケガサル…」

「銃ノ御紋章ヲケス、最大ノ恥辱忘ルルベカラズ…」

等と、軍国青年の顔が表れるのである。弱音を吐く祖父と、「玉碎ヲ覚悟」していたという祖父。どちらが本当の姿であるかといった論は全く無意味なものであるが、私はやはり、晩年の祖父の学問に対するリベラルな姿勢から、彼の皇国史観論者と言えるような側面を信じていけない。極端な非日常である戦争が、一時的に彼の感覚を狂わせた。私はそう思いたいのである。祖父は本当に心の底から、かの日記を書き付けたのであろうか。私には、軍の上官に怯えた彼が、思ってもいないことを書き付けたのだと思えてならない。果たして、祖父の心はどこにあったのであろう。

さて、疑問は残るが、日記の話はこれくらいにして、あとは私が集めた祖父の戦争話を整理することによって、軍隊生活の空白を埋めたいと思う。

まず、戦闘に関してだが、祖父は直接的に戦闘に参加することがなかった。これは彼が配属されたのが高射砲部隊であったという要因による。しかも当時の日本軍の高射砲は極めて性能が低く、とても米軍の戦闘機には届かなかったのだという。戦闘にさえ至らなかったのだ。これは祖父自身の言葉である。

祖父の足には小さな傷跡があり、彼はそれを空襲時に受けた傷だと主張していたそうであるが、私の父曰く、それは嘘であるそうだ。二人とも鬼籍に入っている今では、これも確認のしようがないことではあるが、彼の従軍日記にもその記載がないことから、傷に関する話は冗談の類いであつたようだ。

先ほど、祖父が部下を殴りつけた記載を見たが、彼自身も上官から殴られたことがあるらしい。冬の朝、水で顔を洗うことを嫌った祖父が、やかんでお湯を湧かしていたところ、それを見ていた上官から「甘ったれるな」と殴られたのだという。この話は、我が家では笑い話となっている。私から見ても、この祖父の行動は戦時下のそれとは思えない。甘やかされて育つたのであろうかと勘ぐりたくなるほどである。

とまれ、祖父を取り巻く軍隊生活は暴力に溢れていたようだ。私の父は先のエッセイで、

「父は、学徒出陣で陸軍にいた。懲罰としての鉄拳制裁は、その時に習慣化してしまつたのだらう。」

との推測をしているが、ここまで祖父の軍隊生活を見て、その推測が正しいものであろうとの認識ができた。

因に、私は祖父の口から戦争についての話を聞いた事が無かった。戦争と濃密に関わり、辛い経験をした人は、戦争について言及したがるらないとは言うが、祖父にもそういうった思いがあったのかもしれない。祖父が晩年になって、軍国青年であった自分のことをどう考えていたのかは不明であるが、日記を大切に残しているところから、自分への戒めとしていたようにも思える。私はそんな祖父の戒めを、しっかりと受け入れた（つもりでいる）。

四、学問

前述のとおり、幸運にも勉強に耽る環境に恵まれていた祖父であるが、彼はどのように研究者の道へ入っていったのであろう。まずは、彼の履歴書を見て、その足どりを追ってみたい。

祖父は新潟県小須戸町立尋常小学校を卒業後、県立の三条中学校を経て、大谷大学専門部へ入学した。であるので、京都に暮らし始めたのは、この時期、十七歳ということになる。故郷の新潟から遠く離れた地に一人で暮らすことは、さぞかし心細かったであろうと想像できるが、親族は頻繁に本山を訪れていたようで、その点は心強かったことであろう。下宿先の大徳寺は、気持ちがいいほどに静かで、勉強が捗ったという。

学問の志に燃える祖父は、大谷大学専門部を卒業後に大谷大学文学部国文学専攻へと進むことになる。広大に広がっていた好奇心の宇宙が結節点をむかえ、縮小に転じたのはこの頃かもしれない。時に昭和十六年のことであった。

彼の思い出話の中に、結核で入院をしたという話を聞いたことがあるが、それも恐らくこの時期のことであったと思われる。病に臥せった祖父は、苦しいながらも退屈であつたらしく、古文書と睨めっこし、それにより古文書読解の力を身につけたそうだ。中近世文書の解説に四苦八苦している私からすれば、羨ましい話である。やはり、勉強をすることに關しては、邪魔になるツールが圧倒的に少なかった当時の方が、よほど良い環境であつたろうと思えてならない。こんなことを言つては祖父から怒られそうであるが、私のような意志の弱い人間にとつては、大事な問題である。

さて、入学から二年の後、祖父は大谷大学を卒業することとなる。たしかこれは、戦争の激化に対応した繰り上げ卒業であつたと思う。そして、卒業から僅か一月後、未だ二十二という歳ながらに彼は、新潟県立新井農工学校の教諭となる。が、これも同じような要因による特別措置的なものであろう。歳は今の私と同じ頃である。繰り上げ卒業の若造を教諭として学校に送り込むのであるから、国内は相当動揺し始めていたのではなからうか。元来、人にものを教えることが好きであつた祖父ではあるが、未だに専門知識を獲得し尽くしたとは言えない年齢であらうし、勤務上では苦勞が多かつたに違いない。

祖父が臨時招集されたのが、教諭を始めた一月後のことである。これは全くの想像であるが、恐らく彼は、生徒たちから激励を受け、誇らしく招集に応じたのであろう。先に参照した日記の内容が、私にそんな想像を強いた。

その後二年間の軍隊生活は、祖父の人間形成に大きな影響を与えた。思い返せば、晩

年でも祖父は、朝は七時ぴったりに起き、夕食ならば十九時ぴったりに食べ始める、といった、妙に時間を気にする癖を持っていた。こうした規則正しい生活のリズムも、軍隊生活で染みついたであろう。起床・食事・就寝、全ての中に軍隊生活の名残りがあつたとするなら、その時身についた鉄拳制裁が変わらぬままに引き継がれていても、なら不思議はないのである。

話題が前章と重複してしまうので学問の話に戻ろう。祖父は召集解除から八カ月後、再び新井農工学校へと戻った。御国の為にしっかりと戦つてこいと送り出されたであろうから、この帰還にも複雑な心境が伴つたに違いない。誠に戦争の影響力たるや凄まじいのである。

再び教諭となつた祖父は、教師に専念すると思いきや、僅か三カ月で学校を後にしてしまうので驚きだ。次にむかつたのは、真宗大谷派本願寺。言わずと知れた、大谷派の本山である。彼はここで、内地留学生を命じられたらしい。この本願寺の内地留学制度について、私は詳しいところを知らないが、恐らくは、本人が志願してのことであろう。繰り上げ卒業で学問の時間を奪われた分、更に学問を深めたいという欲が募つたのではなからうか。ここから、祖父は学問に専念することとなる。戦争に邪魔されることなく、好きな学問を好きだけできる。これは祖父にとって、何よりの喜びであつたに違いない。

本願寺より内地留学生を命じられたのは昭和二十一年七月、祖父が二十五歳のころであつたが、その三カ月後に彼は公務員の職を辞している。思う存分学問に集中しようという気持ちの現れともれる行動だ。そして、彼は内地留学生として意気揚々と京都大学に入り、三年後の同大國文科修了まで、この地で学問を修めることとなる。同時に祖父は大谷大学専門部の教授を嘱託されているので、生活の基盤はここにあつたようだ。こう言つてはなんであるが、新潟の片田舎で教師をしては最先端の研究に触れることができないであろうし、京都で教師をしながら大学に通えば、ぐんぐんと知識の量を増やすことができたであろう。

祖父はその後、二十八歳で大谷大学の助手となる。そしてそれからは、他の研究機関に移ることなく、名誉教授となるまで同大に世話になつていく。細かな学内の役職の変化はあるものの、京都の地に根を下ろすことが決まつたのだ。私が京都で生まれることとなる要因は、ここにある。そう思うとなんとも不思議な感覚がするものだ。

そして祖父は、この京大学生期間に、私の祖母と結婚する。祖母も一時期、家の事情で新潟に住んでいたことがあつた。その頃は祖父と知り合う機会も無かつたであろうが、祖母は後に祖父と同じ古典の教師となり、新潟の学校に勤めていたので、この際に二人は知り合つたのであろう。詳細は分からないが、なんとなくそんな事を聞いた記憶があ

る。所謂「でき婚」（今は授かり婚と言わなければならないのか）であったらしいが、そこで生まれたのが私の伯母である。もし、祖父の農工学校教諭時代に子どもができていれば、彼はそのまま新潟に居住し続けることとなったであろうし、そう考えると人の一生は数々の偶然に左右されているということが実感できる。

祖母はこれを期に、教師の仕事を一時休んでいたものと思われる。彼女は私が生まれるずいぶん前に逝去しており、その性格を知ることができないが、古典の教師らしく、歌をよくしていたらしい。私の手元にも祖母の歌集（自費出版か）が有るが、これが祖母の内面を知るに案外役立っている。少くさい話ではあるが、私は残された著書を通して、鬼籍に入っている曾祖父・祖父母・父といつでも会話をする事ができるのだ。

因みに、この祖父と祖母の結婚には、行順寺の十四世住職である祖父の長兄「E」氏が、猛反対したらしい。祖父の異母弟「Z」氏によると、「E」氏は祖母に学があることが許せなかつたらしい。当時、大学出の女性は少なかつたであろうし、女性には学問は不要との考えも色濃かつたのであろう。しかしながら、二人の間には既に子どもができていたこともあり、なんとか結婚は認められたようである。

「Z」氏曰く、「E」氏は祖父に適当な跡継ぎ不在の寺をあてがい、住職にしようとしていたらしい。もしそうなっていれば、私もいよいよ僧侶になっていたかもしれない。権力好きで、いたって俗物の私が、僧侶になるとは考えられないが、こういう妄想はおもしろい。

またしても少し話がそれたので、祖父の研究について調べてみよう。

祖父の専門は近世俳諧であり、著書にもその関連本が圧倒的に多い。彼が初めて世に送り出したのが、『芭蕉七部集総索引』といった書物で、それからは七十六歳で最後の上梓をするまで、計二十三冊の著書を出版している。これは、作家である私の父の著作数とほとんど変わらぬ数であり、なんとも因縁深いものを感じざるを得ない。もし私が本を出すような立場に成り得れば、著作が二十を超えたところで死を意識したほうがいいのかもしれない。

私が言うのもなんだが、学者としての祖父の優れている点は、その実践的な研究姿勢にあった。『易占と日本文学』という著書を上梓するにあたっては、自身で占いを学んだし、フィールドにもよく出かけていたのだ。こういったところは、刀鍛冶の小説を書くために刀鍛冶の元に通い、鉄砲鍛冶の小説を書くために実際に火縄銃を撃ち続けた父と似ている。我が家族ながら、見習うべき研究姿勢である。

祖父の学位は文学博士である。現在では博士号が研究者にとつてのスタート地点のような様相を呈しているが、彼が文学博士の称号を受けたのは、四十六歳、教授時代のことであった。今とは博士号の重みが全く違うのだということがひしひしと感じられる。

学位論文は、「元禄俳諧精神の研究」と題されたものである。これに関しては、私にも今後の勉強の為に目を通しておきたいという気持ちが無いわけではないのであるが、如何せん興味が及ばず、やはり今の今まで未読のままである。大正生まれの祖父の文が多少難解であるのもその理由の一つであるが、要するに私が不真面目なのである。

祖父の著作に目を通したうで種種の分析を加えたかったが、無理はしないでおこう。私自身、卒業論文の進み具合が芳しくなく、残念ながら数多い祖父の論文を読む時間が無いのである。これに関しては彼もきつと、「自分の勉強に集中しなさい」と言ってくれるはずだ。(その前に私の普段の不勉強さに喝を入れられるに違いないが)。

祖父は私が幼いころに、私の広い額を撫で回しながら、「この子は頭がよくなるに違いない」とよく言っていたらしいが、そんな孫は二十一にもなって祖父の著作を読み得ぬのである。謝っておこう。ごめんなさい。いつか読みます。

五、僧侶として

寺院の生まれであるという要素も、祖父の人格形成に大きな影響を与えたに違いない。が、私は同居時代、彼が僧侶であるということに自覚したことはなかった。朝に「正信偈」の一つを読むでもなく、肉食を避けるでもなかったのである。そんな祖父は、いったいどんな僧侶であったのだろうか。

くり返しの言及になってしまうが、祖父が生まれたのは越後国三条教区第十九組の雪国山行順寺という寺院である。かの寺の開基は武田兼之助信定という人物で、彼は武田勝頼の庶子であるという伝承を持つ、なんとも胡散臭い（失礼とは思うが）人物だ。信定は天正十年の生まれで、私にとっては十六代前の先祖ということになる。寺伝によると、越後の地に寺を構えたのは江戸時代に入ってからのことであるようだ。さしたる歴史は持たないが、私にとっても愛すべきこの寺院が、祖父の生家行順寺である。

当然至極のことではあるが、父や私は得度などしておらず、寺院に関しての知識は皆無である。よって、ここでは大きな誤りを犯すであろうが、とりあえず祖父の僧侶としての足跡を辿ってみよう。

記録によると、祖父が得度したのは十八歳の時、昭和十五年のことであるという。祖父はこの時期に大谷大学専門部に通っていたのであるから、京都に住み始めたことをチャンスに、本山で得度したのであろう。法名は本名そのままである。得度に際して彼がなにを思ったのかは、謎である。が、青年期の間、彼はずっと坊主頭で通っていたので、剃髪に関してはなんら抵抗がなかったはずだ。これなら、得度に際しての剃髪を、クラスメイトから猛烈にいじられるという心配もなからう。

さて、この後の経歴は、私にとって難解極まりないものだ。一応、祖父の履歴書から目についた僧位を挙げておこう。

昭和十九年、補僧都。二十一年、堂班本座六等。二十二年、衣体朽葉色特衣。三十四年、補大僧都。三十九年、堂班本座一等。

こういった僧位は、おそらく年齢と本山への献金具合によって左右されるものである。右に挙げた僧位が低いものなのか、高いものなのかは全く分からないが、祖父は寺持ちではなかったのだ、それほど高い位であったというわけではなからう。それにしても、俗から離れた存在であるはずの僧侶たちですら、階級にすぎりついているのは興味深い。初めに言及しておいた人間の根源的差別意識をここでも垣間見た気分である。

この章を書くにあたって、私は祖父の僧侶としての側面をなんとか思い出そうとしてみた。が、これが一つも思いつかぬのであるから、困ったものだ。どうやら、祖父は戒

律の厳しくない真宗の信徒のなかでも、さして熱心な方ではなかったようだ。私の家には、未だ彼の法衣や略袈裟が残されているが、最早こういった僧侶らしい遺品にさえ、違和感を覚える。

僧侶である祖父が、我が家に慣習として残した仏教行事等は皆無に等しいのである。強いて挙げるとしても、お焼香が正しくできるだとか、「正信偈」を少し覚えているか、そんな些細なものである。

私も宗教には熱心な方でもないが、時がたてば我が家に僧侶がいたことも忘れ去られてゆくであろう。これはなんとなく寂しいことだ。さながら末法の世である。それならば、日々の生活の中で時折思い出しては、南無阿弥陀仏と呟いてみるのも悪くはないのかもしれない。

六、晩年

駆け足気味で駄文を連ねてきたが、いよいよ祖父の晩年について触れてみよう。彼の晩年を語るに際して、避けては通れぬ事件がある。それが、「奥の細道自筆本真贋論争」だ。

平成六年生まれの私にとっては遠い昔のことであるが、平成八年にあるニュースが世間を賑わせた。なんと、松尾芭蕉直筆の『奥の細道』が発見されたというのである。このニュースは国文学会だけではなく、お茶の間からの注目も集めた一大ニュースであった。もし、発見された『奥の細道』が本物ならば、これほど貴重なことはない。それは国文学会にとって、大いに喜ぶべきことであったのだ。

しかし、一方でそんなセンセーショナルなニュースに眉をひそめる人物もいた。松尾芭蕉を専門とする、私の祖父に他ならない。

祖父の教え子である K.Y.氏によると、祖父は渦中の『奥の細道』について、真つ先に「あれは怪しい」と言ったそうだ。日頃から多くの書を目にしている彼にしてみれば、かの『奥の細道』には誤字や脱字が考えられないほどに多く、程度の低い贋作にしか見えないのだという。

世間がかかる世紀の発見に沸いている真つ最中のことである。彼のこの発言は、一部の人間にとっては面白くないものであった。ここで勃発したのが、「奥の細道自筆本真贋論争」である。多くの学者がどちらかの側に立ち、真贋両サイドから盛んな議論が行なわれた。が、祖父の分は相当に悪かつたらしく、彼が学会で一人批判の矢面に立たされる場面もあったそうだ。今となっても、かの論争には確かな決着がついていないが、祖父はこの論争の最中に果敢なくなつたので、どうやら論争は祖父の負けといった感が否めない。父は論争に関して、「あれは、(私の)おじいちゃんの説が正しかった」と言っていたが、世間はそうは思っていなかったのだ。

しかしながら、この一連の論争は、祖父の延命に役立ったとも言えるのであるからおもしろい。私の母曰く、この時の祖父はいやにハキハキしていたのだと言う。論争相手の学者から嫌がらせに近い手紙が届いた際には、「(私の母)さん、私も手紙を出してくよ」などと言って、妙に張り切っていたそうだ。その嫌がらせに近い手紙というのは、使用済みの封筒をなんとか修正し、再度別の送り先である祖父に送るなどといった、子どもじみたものであったらしく、これには差出人の学者の幼稚さ加減に呆れることしかできないが、祖父も何らかの形で嬉々として報復を試みたのかもしれない。学者間の対立には子どもじみた喧嘩が多いとはよく聞くが、少なくとも肺ガンに苦しんでいた祖父

は、この事件をきっかけに、多少なりとも活力を得たようだ。不毛には違いないが、が、やはりと言うべきか、そうして得た活力もそう長くは続かなかった。所詮は対抗心から生まれた活力であったのだ。

論争の真っ最中、祖父の病状はみるみる悪化していった。この頃には物心ついていたはずの私ではあるが、残念なことにより記憶が残っていない。深泥池にほど近い病院に見舞いにむかった覚えはあるが、祖父の様子などは一切思い出せないのだ。覚えていたのは庭先に咲いていた真っ赤な彼岸花だけである（これにも何か因縁深いものを感じる）。果たして祖父は私の見舞いを喜んでくれていたのだろうか。彼の動く姿を、私はどうしても思い出すことができない。

それでも想像するに、祖父は死に直面して、いろいろなことを考えていたはずだ。それはなんだろう。死を見つめた彼の頭に、まず浮かんだことはなんだろう。

晩年、祖父は当時ゴーストライターをしていた私の父について、

「息子がライターをしています。

雑誌などにも色々と文章を書いています。某有名漫画シリーズのライターをしたこともありました。その作品には沢山のゴーストライターが関わっていました。うちの息子の文章が一番好評だったんです」

と、誇らしげに教え子に語ったことがあるという。もしかすると、息子との関係が悪いことを、生涯悔いていたのかもしれない。

そうでなければ、両親や兄弟のこと、戦争のこと、過去の自分についてあれこれ想いを巡らしていたのかとも想像できる。いや、それともやはり進行中の論争のことに夢中になっていたのかもしれないし、将又先に亡くした妻のことや、まだ幼い孫たちのことを考えていたのかもしれない。

結局のところは想像の域をでないが、苦しみの中、祖父は病床で筆を取り、

「無量寿とは永遠なるもの。不可思議光とは広大なるもの。宇宙を支配している根源的なもの。無限のエネルギー。万物をあらしめている中で、人間も生死する。南無阿弥陀仏。」

とおもむろに手帖に書き付けたという。彼の思考は、案外世俗的なところを離れ、心静かに死を受け入れようとしていたようだ。

そして、死の前日、今度は、

「来るぞ、迎え」

とだけ書き付け、そのまま果敢なくなった。

西暦二千年。国文学者であり僧侶でもある私の祖父。七十九歳であった。私の一族にとつては、それなりに長生きした方である。

一昨年、実父の死に直面して、私は人生の無常さを感じずにはいらなかった。人はいつ死ぬか分からないということを、幸運にも私は忘れていたのである。

父は死に際して、祖父と同じようにメモ帳に文字を書き残した。

「書いても書いても満たされない

自分を描きたい

長生きしたい。もっと先がある」

朦朧とする意識の中、自分が生んだ小説世界の中に迷いこんだ夢を見たとき、私に知らせてくれた父の顔が浮かぶ。

人は死ぬと、時とともに人々から忘れ去られていく。どんなに一生懸命生きようが、死んでから百年たつても誰かから思い出されるような人は、そう多くはないだろう。

私も死んだらいつか忘れ去られる。それが悲しくてならないのだ。

だから私は、自家の系譜を調べ、それを伝える。そうすれば、少なくとも私の子孫たちは、私のことを覚えていてくれるはずだ。これも、私が狭い意味での系譜学を学ぼうとする理由の一つだ。

今後はこういった心性理解をも念頭に、著名な系譜伝承にあたってゆきたい。そうやって系譜に書かれた人々、系譜を作った人々の気持ちを立体的に捉えていけば、私の目はより大きく開かれるかもしれないし、初めに述べた、人間と系譜の正しい付き合い方について、答えを出せるかもしれない。系譜は人間を見つめるうえで重要なツールであると私は思うし、私の夢はあくまでも研究者であるのだ。

その勉強に大いに役立つているのが、祖父と父が私に残してくれた膨大な蔵書群である。途方も無い数の『群書類従』は、私に驚くほどに細やかな記録を教えてくれ、辛くも虫食いを逃れている埃っぽい『和漢三才図絵』は、私に無限の好奇心を与えてくれる。

二人は死んだが、私がかの蔵書を開き、二人のことを思い出す限り、二人は私の中に生

き続けるのだ。いや、二人だけではない。無限に広がる先祖たちを実感することが可能なのだ。

先祖調査は先祖を蘇らせる調査でもある。私の調査一つで忘れ去られていた先祖が蘇るのだ。こんなにおもしろいことはない。

私の思想はどちらかというと革新的であった父に似ており、いたずらに「イエ」制度を擁護する穂積八束のような発言はできる限りしたくない。そうではあるのだが、私山本渉がこうして生きて、歴史を学んでいるのにはちゃんと理由があるということを、忘れたくはないのである。

父に憧れるところの多い私は、意識的に自分の思想を父に近づけようと、「辻潤的ニヒリズム」に満ちた生活の中で、マルクス・サヴィンコフ・網野善彦・宮本常一・中原中也・大杉栄等を読み続けてきた。今でも山之口獺の詩集をひねくり回しては、魅力の分からぬままに悦に浸っていたりもするし、全く同じような様子でアナキズムに憧れてみたりもしている。そうではあるのだが、どうやら私は元来、ひよつとすると極めて保守的な人間であるのかもしれないということにも気がついてしまった。

意識をしても、色付くのは表面ばかりであった。これは私にとっては実に重く、苦しい葛藤である。

薄っぺらな「クールジャパン」の打倒を目標とする私が、結果として「イエ」制度の肩を持つかのような（あくまでもそんなつもりはない）結論を吐いていることには、我ながら違和感を覚えてしまう。私からすれば、ただ先祖の生き方を知ることのみに集中して仕上げた課題のつもりであるのだが、第三者にどう映っているのであろうか。それほどばかりは分からない。ただの保守論者と見なされるであろうか。それとも、私の願う通りに、新しい系譜との付き合い方を模索する人間と見なされたであろうか。もし、前者と捉えられてしまったのなら悲しいが、これは私の思考整理の欠如に原因があるろう。仕方のないことだ。しかし、私が事実、先祖たちの生涯を知ることを楽しみとしている人間だということは、認めなくてはならない。

系譜に纏わる過去の身分などを誇ってはいけませんが、先祖たちがどのように生きたかを知ることが重要である。確か私は「はじめに」でそう述べた。しかしながら、私に先祖の地位などを誇る気持ちが一切無いかと問われれば、未だそれは極めて怪しい。私は世俗的で矮小な人間であるし、それほど人と系譜の付き合い方は難しい問題であるのだ。やはり無学の私にここで結論を出すことはできないが、一生を通して考えていければ、それで満足なのである。

こんな駄文を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。